

ラトナーカラシャーンティの菩行道 ——*Prajñāpāramitopadeśa* における——

早 島 理

インド大乘仏教思想史の最後期に属する代表的な仏教哲学者の一人ラトナーカラシャーンティ (Ratnākaraśānti, 10~11th., 以下ラトナーカラと略) は、その著「般若波羅蜜多論 (*Prajñā-Paramitā-Upadeśa*, 以下 PPU と略)」において彼の菩薩道ともいべき瞑想の四階梯を展開している。この瞑想の四階梯の内容およびこの瞑想の階梯と三性説との関連性を以下に考察してみよう。

ラトナーカラは PPU において仏教の真理を、聞・思・修の三慧および尽所有 (yāvadbhāvika)・如所有 (yathāvadbhāvika)¹⁾ とから探求し、最終的に「瞑想の四階梯」に要約している²⁾。この要約に先立つてアーガマ (教証) として「楞伽經」第 X 章 256~258 の著名な三偈が引用されていることは周知の通りである。PPU のエッセンスともいべきこの瞑想の四階梯の概要は以下の如くである³⁾。

(Ⅰ) *Yāvadbhāvikāmbana-yogabhūmi (あらん限りのものを瞑想の対象とする段階)

この世界のあらゆる存在は五蘊・十二処・十八界のみであり、それ以外に、たとえばアートマンの如き絶対者・自律的普遍的存在者は何ら存在しないと観察する。

(Ⅱ) *Yathāvadbhāvikacittamātrāmbana-yogabhūmi (唯心を瞑想の対象とする段階)

先に観察した五蘊・十二処・十八界などの諸存在も実は名称のみ (nāmamātra) であり、名称に対応する何らかの実在が外界に存在するのではなく、この世界はただただ心のみのものであると観察する。

(Ⅲ) *Yathāvadbhāvikasarvadharvatatātāmbana-yogabhūmi (真如を瞑想の対象とする段階)

この世界は心のみ・表象のみであり、その唯一の心のなかにあらわれて来る様々なもの、身体・樹木・家・河・海などなどはすべて虚偽なる形象 (alīkākāra) である。したがってそれら虚偽なる形象の顕現を滅すれば、それを認識する心そのものも必然的に消滅すると観察する。

(Ⅳ) *Anāmbana-yogabhūmi (対象のない段階)

虚偽なる形象も顕現せず、唯心という想いすらも消滅し、瞑想の対象は何ら存在しない無顕現の境地である。

さらに、ラトナーカラはこれら瞑想の四階梯における止観の修習をくり返しくり返し強調する。すなわち、止・観・止観双運の三段階よりなる三昧が各階梯における具体的な実践内容なのである。かように各々の階梯における三昧・瞑想の内容は詳細に説かれている。それでは、ここなる階梯からより高位の階梯への悟入——瞑想の四階梯に応じて悟入は三種である——を、あるいは瞑想の階梯そのものを成立せしめている理論的基盤はどのように考えられているのであろうか。

これら瞑想の四階梯の論述において、悟入の根拠そのものは直接には何ら言及されていない。たとえば、第一の悟入 (yāvadbhāvīkāḥ lambanaḥ ⇒ cittamātrāḥ lambanaḥ) において、五蘊・十二処・十八界のみと観察されたこの世界がそのまゝ心のみにすぎないことを了得する次第に関してはただ次のように説かれている。

〔物質 (rūpa) という〕名称そのままに対象が存在するのではないから物質は名称のものであり、〔物質が〕対象として〔外界に〕実在するのではない⁴⁾。

さらにラトナーカラはいう。

偶然に名称を〔対象に〕結びつけているのであり、言語設定された〔存在 (prajñapti) にすぎない〕対象は、〔実は〕心のみのものであり、心とは別に客体なる何らの対象も存在しない。それら種々のものは言語表現を超え、主体・客体 (grāhyagrāhaka) を離れた心のみのものであり、言葉の仮構 (mano jalpa) すべてを滅している⁵⁾。

このように五蘊・十二処・十八界などのあらゆる存在は名称をもつて分別・構想された存在であり、名称に対応した対象が実在するのではない。さらに外界の存在とは単に言語的・概念的に仮構された対象 (grāhya) でしかありえない。それゆえ仮構された対象も、また対象を名づけ概念化する主体 (grāhaka) もともに非実在であり、この世界はただただ心のみのものであると了悟すること、それが唯心への悟入であるといえよう。

この悟入の次第とその根拠となる考え方が瞑想の四階梯に先立つ箇所、より論理的に叙述されている。

……それゆえにあらゆる存在は心のみ、知識のみ、顕現のみであるから、知識の対象 (grāhya) として外界存在 (bāhyārtha) は存在せず、したがって知識もまた認識主体 (grāhaka) として存在しない。これら [grāhya-grāhaka] の二は言葉の仮構にすぎず、それゆえあらゆる存在は仮構されたあり方を本質とする存在 (parikalpitasvabhāva 遍計所執性) である⁶⁾。

ラトナーカラ自身が瞑想の四階梯の論述に際して三性説や三性の個々の名称を用いることは一度もない。しかし上述の如く、この第一の悟入は三性説に、個別的には遍計所執性に依拠したものと見なすことができよう。唯心への悟入とは、この世界が遍計・構想された世界であることへの自覚であり、この世界は外界に実在すると思ひ込まれた存在と思ひ込む作用、対象と名称という、いわば概念的な主体客体（grāhya-grāhaka）関係のうえに仮に成り立つている、と了得することに他ならないのである。

第二の悟入（cittamātrāmbana⇒tathatāmbana）についても、同じく三性説、個別的には依他起性とその理論的基盤になつていと考えられる。この真如への悟入は瞑想の階梯においては次のように説かれている。

「これは物質である」乃至「一切法である」という名称としての顕現、対象としての顕現……それら〔の顕現〕は迷乱〔知〕の対象であるから迷乱の姿をしており、言葉の虚構（prapañca）の姿をしており、顛倒したものである。……この顕現は……虚妄なる顕現である。このように、この顕現はある限りその限りにおいて迷乱である。なんとすれば虚妄なるものを見て勝義を見ていないからである⁷⁾。

このように、唯一の心、表象のみの世界が迷乱知という知識（主体 grāhaka）とその対象（客体 grāhya）とに分離し、ともに虚妄な、虚偽なる迷乱した形象（ākāra）として顕現するのである。それが我々凡夫にはこの種々雑多な世界としてあらわれて来るのである。これら虚妄なる顕現とその排斥とに關するより論理的な記述は、第一の悟入と同じく、この第二の悟入に先立つてすでに述べられている。

〔これらの諸存在は〕どこに構想されるのか、といえは〔外界の〕対象が存在しないにもかかわらず、遍計所執性に対する執着の潜在印象から生じ、対象であるかの如くに顕現する虚妄なる分別（abhūtaparikalpa）のうちに構想される。この虚妄なる分別は〔あらゆる〕存在の、他への依存を本質とする存在（paratantrasvabhāva、依他起性）にして、迷乱したものであり、倒錯したものであり、誤つた知識でもある。〔虚妄なる分別のうちに顕現する〕主観客観の形象（grāhyagrāhakaākāra）は迷乱したものであり、錯乱のみのものとして顕現しているから虚妄である⁸⁾。

このように第二の悟入とは、唯一の心に顕現する迷乱知とその対象との二つの形象を、ともに虚妄なるが故に否定することである。その場合この主観客観として顕現する虚偽なる形象が排除されても、その二が顕現して来ところの虚妄なる分別、依他起性そのものは、二なる形象が顕現する根拠として否定尽くされず、なおあまれるものとしてそこにある。あたかも夢の内容が実在として否定されても夢を見た事実は否定し得ないように。このように、虚偽なる顕現とその否定と

からなる第二の悟入も、虚妄なる分別・依他起性を、すなわち三性説を根拠として成立していると考えられるのである。

同様のことは第三の悟入（tathatālabhāna⇒anālabhāna）に関しても成立するのである。この悟入の基底をなしているのが完成されたあり方を本質とする存在（pariṇiṣpannasvabhāva, 円成実性）であることは言を待たないであろう。紙面の制約上詳細な論証は省略せざるを得ないが、ラトナーカラは瞑想の第四階梯について次のようにいう。

あらゆる存在は空性であるから〔瞑想の〕対象として〔すら〕存在せず、まったく無顕現（anābhāsa）であり、何ら汚れなく、究極にして虚空の如く顕現し、出世間智である⁹⁾。

そして、この無顕現なる出世間智は、

この〔出世間智〕は、迷乱せず、倒錯せず、不変化であるという点で、円満な完成されたものであるから、完成されたあり方を本質とする存在（円成実性）である¹⁰⁾。

と述べられており、

たれであれ、熱心に長時間修行して修行の究極にいたれば、ありありと光り輝くものがある¹¹⁾。

と説かれているように、光り輝く境地こそこの瞑想の四階梯の最終到達階位——円成実性の世界に他ならないのである。

これまでの論述で明らかなように、ラトナーカラは瞑想の四階梯を説くにあたって三性説を直接に論じることはない。けれども、ここなる階梯からより高位の階梯への三種の悟入は明白に三性説がその論理的基盤として成立しており、それゆえこの瞑想の四階梯も三性説に支えられたものである。そして、この三性説を基盤に成立している瞑想の階梯こそラトナーカラの修行道なのである¹²⁾。

-
- 1) yāvadbhāvika, yathāvadbhāvika に関しては長尾雅人「中観哲学の根本的立場」（『哲学研究』vol. 31, No. 11）参照。2) PPU のシノプシスについては桂紹隆「A Synopsis of the Prajñāpāramitopadeśa」（『印仏研』vol. 25, No. 1）参照。3) P. 177a~181a, D. 156a~159a 参照。4) PPU, P. 178b1, D. 157a3. なお PPU の翻訳は京都産業大学助教授一郷正道氏、広島大学講師桂紹隆氏らを中心とする研究会の成果である。ただし訳語の選定などの責任はすべて筆者にある。5) PPU, P. 178b 4~6, D. 157a5~7。6) PPU, P. 161a5~6, D. 142a7~b1。7) PPU, P. 179a3~7, D. 157b4~7。8) PPU, P. 161a6~b1, D. 142b1~3。9) PPU, P. 169b6~8, D. 149b7~150a1。10) PPU, P. 161b3~4, D. 142b4~6。11) PPU, P. 169b4~5, D. 149b5~6。12) なお、ラトナーカラと初期瑜伽行唯識思想や後期中観派（シャーンタラクシタ、カマラシーラなど）との関連性については稿を改めて論じる予定である。